

関東・甲越地区におけるスモン患者の検診 — 第 35 報 —

中嶋 秀人 (日本大学医学部内科学系神経内科学分野)
小川 克彦 (日本大学医学部内科学系神経内科学分野)
白岩 伸子 (筑波技術大学保健科学部)
森田 光哉 (自治医科大学附属病院医学部内科学講座神経内科)
柴田 真 (群馬大学医学部附属病院脳神経内科)
尾方 克久 (国立病院機構東埼玉病院臨床研究部)
山中 義崇 (千葉大学大学院医学研究院脳神経内科学)
川上 途行 (慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室)
菅谷 慶三 (東京都立神経病院神経内科)
中村 健 (横浜市立大学附属病院リハビリテーション科学)
長谷川一子 (国立病院機構相模原病院神経内科)
松原 奈絵 (国立病院機構西新潟中央病院臨床研究部)
新藤 和雅 (山梨大学大学院神経内科)
川戸美由紀 (藤田医科大学衛生学講座)

研究要旨

令和 4 年度の関東・甲越地区の現況を明らかにした。受診者数は対面 44 名と電話問診 29 名の計 73 名 (平均年齢 82.3 歳、男性 29 名、女性 44 名) で、昨年度から 3 名減少し、75 歳以上が 82.2% を占めた。受療状況は在宅が 76.7% を占め、長期入院入所は 13.7% で昨年度より 1.9% 増加した。受診者の 61.6% が毎日または時々介護を必要とし、一人暮らしは 31.5% と昨年より 4.8% 増加した。ADL や歩行障害の推移に変化はないが、転倒経験者の半数は転倒回数が多く、骨折の受傷につながっていると考えられた。一昨年度はコロナの影響と思われる介護サービス利用の減少があったが、令和 4 度は訪問リハビリテーション、短期入所、福祉用具貸与の利用などの回復が増加が見られ、日常生活レベルを維持している様子が伺えた。高齢化や独居者の増加より、検診受診が困難な状況もうかがえるため、受診者数を維持する取り組みも必要である。

A. 研究目的

昭和 63 年度から関東・甲越地区にて行っているスモン患者の検診を継続し、令和 4 年度の関東・甲越地区におけるスモン患者の現況を明らかにする。

B. 研究方法

関東・甲越地区のスモン患者のうち、1 都 3 県の在住者には主にチームリーダーが検診案内を郵送し、そ

れ他 5 県は主に検診担当者が連絡した。検診後に送付された「スモン現状調査個人票」とスモン医療システム委員会からの集計資料をもとに、同意の得られたスモン検診患者の現況を分析した。

(倫理面への配慮)

本研究は、受診者本人自身からそのデータの研究資料として用いることについて、受診時に文書で同意を得て、同意がない場合にはデータから削除した。なお、

データは、匿名化して個人を同定できないようにして集積し、データ解析を実施した。

C. 研究結果

1. 受診者数

同意の得られた受診者数は73名（平均年齢82.3歳、男性29名、女性44名）。受診者総数の継時的推移を図1に示す。令和4年度の受診者数は電話問診が前年度より1名増え、29名あったが、新規受診者はなく、総数は73名で昨年より3名減少した。地域別では、茨城県7名、栃木県1名、群馬県3名、埼玉県6名、千葉県78名、東京都14名、神奈川県18名、新潟県13名、山梨県4名であった。

2. 受診者の年齢

平均年齢は82.3歳と昨年の81.3歳より1.0歳高かった。

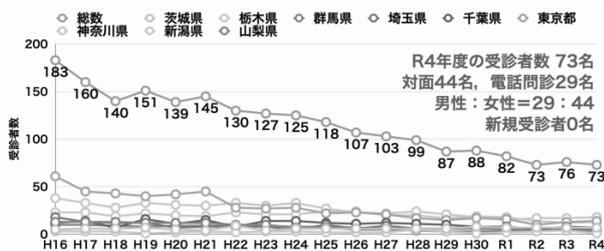


図1 受診者総数の推移

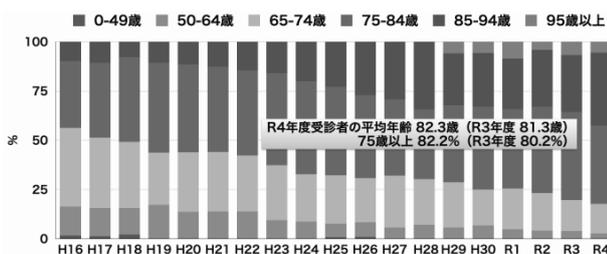


図2 受診者数の年齢層割合の推移

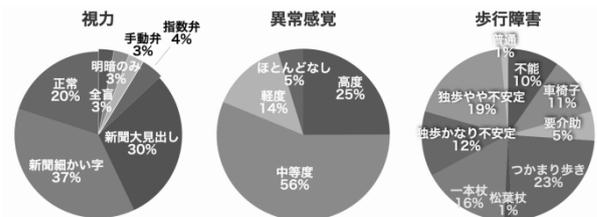
た。年齢構成は50～64歳2.7%、65～74歳15.1%、75～84歳39.7%、85～94歳37.0%、95歳以上が5.5%であり、年々高齢層が増加し、令和3年度は全員50歳以上で、昨年と同様に75歳以上が82.2%と令和3年度よりさらに2%増えた。平成16年からの各年齢層の割合の推移を図2に示す。

3. 療養状況および介護

療養状況および介護について図3に示す。在宅76.7%、時々入院が9.6%、長期入院（入所）は13.7%であり、長期入院入所を必要とする割合は1.9%増加した。受診者の61.6%が毎日または時々介護を必要とし、介護者不在も6.8%でみられ、問題点としてあげられた。主な介護者は配偶者37.3%、子供23.5%、兄弟・姉妹5.9%、ヘルパーなどその他33.4%で変動はないが、受診者の31.5%は一人暮らしで昨年より4.8%増加した。

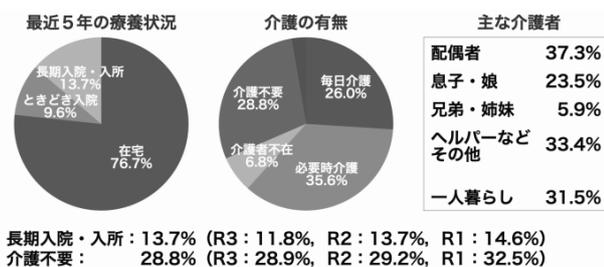
4. 主な症状

視力障害、異常感覚、歩行障害の内訳を図4に示す。視力がほとんど正常は20.0%と低く、指数以下が13.0%でみられた。異常感覚は中等度以上が81.3%あり、痛みも43.8%と10%増加した。歩行障害では介助不要の独歩が32.9%と昨年と同等で、歩行不能・車



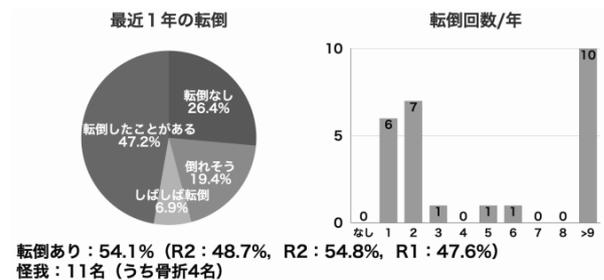
装具なし歩行可能：32.9%（R3：30.3%，R2：32.9%，R1：34.5%）
歩行不能・要介助：26.1%（R3：26.3%，R2：24.6%，R1：24.6%）

図4 主な症状：視力障害、異常感覚、歩行障害



長期入院・入所：13.7%（R3：11.8%，R2：13.7%，R1：14.6%）
介護不要：28.8%（R3：28.9%，R2：29.2%，R1：32.5%）

図3 療養状況・介護の有無



転倒あり：54.1%（R2：48.7%，R2：54.8%，R1：47.6%）
怪我：11名（うち骨折4名）

図5 転倒

椅子・要介助は 26.1%と横ばいで推移した。

図 5 に示すように、最近 1 年に転倒を経験した者は 54.1%あり、令和元年度以降、50%前後で推移していたが、転倒経験者の半数は転倒回数が 9 回以上と多く、怪我が 11 名、うち骨折 4 名と、怪我や骨折の受傷につながっていると考えられた。

5. 併発症

併発症について図 6 に示す。白内障 63.0%、高血圧

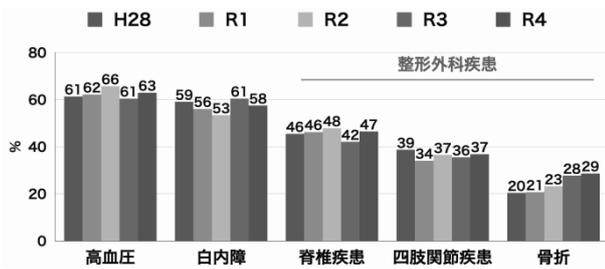


図 6 併発症

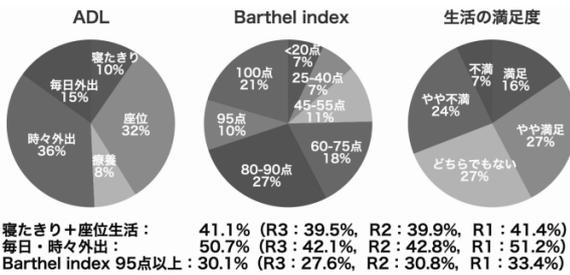


図 7 ADL および Barthel index、生活満足度

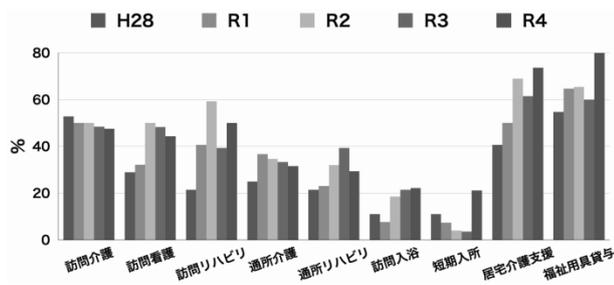


図 8 介護支援サービスの内訳

- 鍼灸治療を受けているか？(スモンでは鍼灸治療の助成あり)：回答6名
 - ・ 1名：受けている
 - ・ 5名：受けていない
 - ・ 効果がない、近くに鍼灸院がない(交通手段、費用の問題)
- スモン症状改善に有効な方法は？
 - ・ 運動
 - ・ 手指(ニギニギ体操)、ストレッチ、貧乏ゆすり、歩行・散歩
 - ・ 温熱療法
 - ・ 入浴、足元のあんか

図 9 患者会からの質問(東京スモン患者の会)

症 57.5%と多く、また、整形外科的疾患である脊椎疾患 46.6%、四肢関節疾患、骨折 28.8%を認めたが、ここ数年、骨折者が増加していた。

6. 日常生活動作(ADL)および Barthel index、生活の満足度

ADL および Barthel index の結果を図 7 に示す。寝たきり 9.6%、座位生活 31.5%と高率であったが、毎日・時々外出以上は 50.7%で昨年に比べ 8.6%増え、Barthel index 95 点以上と機能良好例は 30.1%と昨年に比べ 2.5%増加した。生活満足度では「満足・やや満足」は 42.3%、「不満・やや不満」は 30.9%と昨年と同じ傾向であった。

7. 保健・医療・福祉・サービスの利用

介護保険によるサービス利用状況の結果を図 8 に示す。高齢化とともに在宅での介護支援サービスの利用が増加していることがうかがえる。令和 3 年度はコロナの影響のためか、各サービスの利用が減少したが、令和 4 年度は訪問リハビリテーション、短期入所、福祉用具貸与の利用が増加した。

8. 発表者担当患者会からの報告(東京スモン患者の会)

日本大学神経内科がスモン検診を担当している東京スモン患者の会が行ったアンケート調査を図 9 に示す。助成を受けて鍼灸治療を受けているかという質問に対し、1 名は受けていたが、残りは効果がない、近くに鍼灸院がないという理由で受けていなかった。スモン症状改善に有効な方法はあるかという質問に対しては、運動や温熱療法の効果があるという回答であった。

D. 考察

昭和 63 年度からの検診を継続し、令和 4 年度の関東・甲越地区における患者の現況を明らかにした。受診総数は 73 名(平均年齢 82.3 歳、男性 29 名、女性 44 名)であった。電話問診が前年度より 1 名増えたが、新規受診者はなく、総数は 3 名減少し、75 歳以上が 82.2%を占めた。受療状況は在宅 76.7%、時々入院が 9.6%、長期入院(入所)は 13.7%であり、長期入院

入所を必要とする割合は 1.9% 増加した。受診者の 61.6% が毎日または時々介護を必要とし、介護者不在も 6.8% でみられた。ADL や歩行障害の推移に変化はなく、最近 1 年に転倒を経験した者は令和元年度以降では 50% 前後で推移していたが、転倒経験者の半数は転倒回数が多く、骨折や怪我の受傷につながっていると考えられた。一昨年度はコロナの影響と思われる介護サービス利用の減少がみられたが、令和 4 年度は回復または増加がみられ、日常生活レベルを維持している様子がうかがえた。高齢化や独居者の増加より、検診受診が困難な状況も想定されるため、受診者数を維持する取り組みも必要であると考えられた。

E. 結論

令和 4 年度の関東・甲越地区の現況を明らかにした。受診者は 73 名、うち電話問診は 29 名あり、75 歳以上が 82.2% を占めた。受療状況は在宅が 76.7% を占め、ADL として寝たきり・座位生活は 40.4%、一人暮らしが 31.5% と昨年より 4.8% 増加し、高齢化を背景にした ADL 低下により、検診受診が困難な状況もうかがえた。電話問診を推奨するなど、受診者数を維持する取り組みも必要であると考えられた。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

1) 中嶋秀人, 小川克彦, 白岩伸子, 森田光哉, 長嶋和明, 尾方克久, 山中義崇, 川上途行, 大竹敏之, 中村 健, 長谷川一子, 小池亮子, 瀧山嘉久, 橋本修二: 関東・甲越地区におけるスモン患者の検診第 34 報 . 厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患克服研究事業) スモンに関する調査研究班. 令和 3 年度総括・分担研究報告書, pp. 58-61, 2022.

2) 中嶋秀人, 小川克彦, 川上途行, 大竹敏之: 東京都における令和元年度のスモン患者検診. 厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患克服研究事業) スモンに関する調査研究班. 令和 3 年度総括・分担研究報告書, pp. 84-87, 2022.